

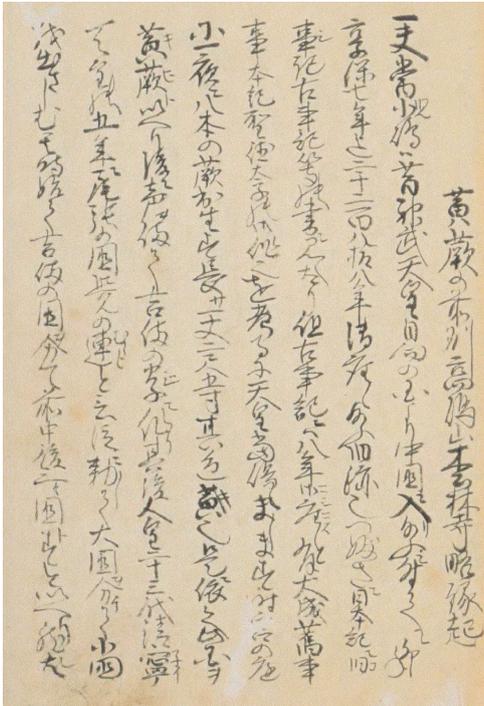
『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』と吉備国語源考

黄蕨・羈縻政策説と日本人バイカル湖畔起源説

平成 30 年度光南台公民館主催講座 光南台実年大学 11 月度報告

黄蕨の会 丸谷憲二

1. はじめに



岡山大学池田家文書の、正徳 3 年(1713)『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』の「黄蕨之前州」に注目しました。『黄蕨』は吉備の最古の表記です。宝暦 2 年(1753)の『黄蕨雑録』(岡山県立図書館蔵)にも収録され、享保 6 年(1721)の『備陽記』に読み下しされています。

「吉備と云国名は当島の蕨よりはしまれり、今に至りて大なる蕨の生けるは此ゆへなるべし」と。

吉備国の語源「黄蕨」については、平成 20 年 8 月 24 日の吉備学会第 2 回歴史研究部会基調報告「吉備とはなんぞや」(岡山県立博物館)で報告しています。

2 高島の早蕨(さわらび)の記録

天保 13 年(1842)の『東備郡村志』に、『大成経』に追記して「今も、此島蕨甚だ多く、又其甚だ早く、春雪を破て出づ。高島の早蕨とて佳産とす。味ひ亦他所

のものに勝て尤も佳なり。季春長じて其莖七八尺に至る。一丈計なるも稀には有べし。上古には一丈余なるも生ぜしか巫(ぶ)べからず。」とあります。昭和 15 年の水原岩太郎氏の『児島参修高島考写』にも、「此の島の蕨は古来高島の早蕨と称して其の風味の佳良なるを人口に膾炙して居る事である。彼の備前国内の名物を列記せる備前往来なる書にも高島の早蕨。」と報告されています。この蕨は現在も自生しているようですが、JA 農協のスーパーでは販売されていないようです。

2.1 高島の早蕨(さわらび)とは

蕨は春の代表的な山菜であり、ワラビ採りの時期は 3 月末～6 月初です。天平 6 年(734)の正倉院文書『造仏所作物帳』にも蕨が記録されています。山地の日当りのよい乾燥地に群生。早春、地中の根茎からこぶし状に巻いた新葉を出し、これが「さわらび(早蕨)」です。「高島の早蕨」の種類の特定が必要です。荒城祥智 松林寺住職も「自分の背丈ほどある。」と説明されます。「澱粉を取ったあとの繊維は水に強く、ワラビ縄として利用されていました。好条件では長さが 2m 以上にもなり、若い拳状の時期は柔らかで味が良い。」とあり、「一丈余なるも生ぜし」「自分の背丈ほどある」との説明に合致します。しかし、「高島の早蕨」の写真は公開されておられません。

3 『陶山系譜』の発見

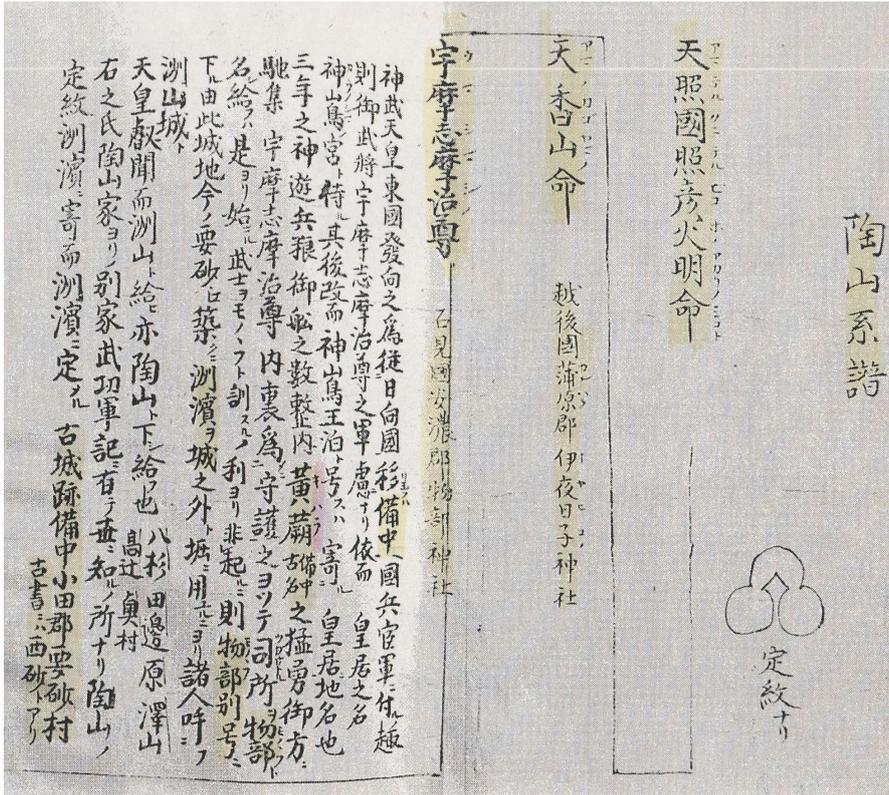
平成 20 年 8 月 5 日に大井透氏(香川県坂出市)より、『陶山系譜』(瀬戸内海歴史民俗資料

館蔵：香川県高松市亀水町：五色台)の調査を依頼されました。

『陶山(すやま)系譜』は神統譜。元祖は天照国輝彦火明命とあり尾張連等の遠祖です。神話に登場する神々から始まる系図であり、それに近い事実が伝承されてきたと考えました。

蕨の文字が陶山系譜では、欠の部分に月になっています。朔です。蕨の異体字と考えました。

『黄蕨・キハラ』備中古名とのルビが有ります。私にとって『黄蕨・キハラ』



備中古名は初見です。ご指導を受けている考古学、中世史の先生方に聞きまくりました。誰も知りませんでした。大井透氏に一度は調査不可としてお断りしました。しかし、大井透氏の『黄蕨・キハラ』が一番重要であるという立場に揺らぎがありません。

4 文献調査結果

岡山県立記録資料館と岡山県立図書館蔵書を調査しました。

4.1 元文 4 年 (1739) 『備陽国誌』 和田弥兵衛正尹他 『不明・黄蕨説紹介』

「大成経に清貞天皇(忍海飯豊青尊)詔りして尾張の覚連を以て、黄蕨(吉備の文字を黄蕨と出来大正史に見えず、今此書に初て出たり。)の前中後を分とあり。是より先日本紀仁徳天皇六十七年に、吉備の中国といふ事見えたり。いづれか是なる事をしらず。」

4.2 安永 7 年 (1778) 『寸箴乃塵 上巻』 土肥経平 『寸箴説』

「吉備国ていふは、吉備子州大八州の一にして、大日本のなり出し時にその称あれば、類もなき古き国名なり。是を寸箴国とも昔し書しより日本紀の积并纂疏に見えたり。又黄蕨国ともかく。それは神武天皇東征したまふ時に、此国高嶋宮にしばし皇居の時、黄なる蕨一夜の中に生出て、是を供御にまいらせしより、黄蕨といふよし、大成経といふものに見えしといへども、此書據とすべきものならねば、信ずべからず。」

4.3 天保 8 年 (1837) 『東備郡村志』 松本亮 『黄蕨説紹介』

「吉備とは黄蕨の転なり。其名の起り此島に神武帝皇居のとき黄なる蕨生ぜり。一夜にして長丈餘、これを端とし国号とす。」・・・大成経は伝書なり此の説信するに足らず。

大歳在乙卯、三月甲寅朔己未、從入黃蕨國兮、起行宮居御、是曰高島宮、積三年間、而楯舟楫蓄兵食也、將欲以一舉而平天下也、大己貴尊兒木勝彥命神、又黃蕨津彥命、爲國首在國頭見天孫、作敬與兒國君命、奉饗奉事、自造陳具、集兵調陳、進奉皇軍、于時行宮庭一夜生八蕨、其長一丈一尺、其太二尺五寸、甚色濃黃、國有人神、云黃光命、即朝奏曰、此草異草也、當治八洲祥、是天爲瑞、軍卒競之、故道此國號黃蕨國、

4.4 嘉永2年(1849)『吉備国史』 小早川秀雄 『黄蕨説』

吉備国「大古は大八州の国とて八つの国有り其八つの一つは吉備の国なり。吉備とは何故に云ふ。其本きわらびの国と云ふ事を略して、きびと云ふなり。此国に黄なるわらびの多く生ずるの山国なれば吉備山とも云ふ。藻塩草に吉備山を載せたり。古語拾遺に云ふ神武帝の時、高嶋宮にます事七年其時に黄なるわらび六本を生ずると云ふ。わらびは山に生ずる品物なれば上古は山のみにて田野は後に開き発(おこ)しぬる土地かとは思はる。」と。

4.5 昭和5年(1930)『岡山県通史』 永山卯三郎 『黍説』

『吉備の文字、一樣ならず、日本紀に「吉備」、日本紀纂疏に「寸籴(きび)」、古事記に「岐備」又「黄蕨」と記し又、夜叉国、廣遠国と見ゆ。』『吉備の名義 大成旧事本紀に「黄蕨(キワラヒ)国、作者作吉備之字」と黄蕨「キワラビ」省略されて「キビ」となると面白き説明なり。固より信據するに足らざる俗説なれども従来汎く世に行はれたる説なり。』「吉備はキビ(黍)にして吉備国の土地、黍穀の耕種に好適しその産額頗る多く古来黍酒、黍団子の料となりしことは万葉集の歌にも見えて其の名産たり。」

4.6 平成2年(1990)『岡山県史古代Ⅱ』 吉田晶 『不明・黍説紹介』

現在の岡山県全域と広島県東部を中心とする地域(美作・備前・備中・備後)は、古代では「吉備(きび)」と総称されていた。なぜこの地域が「吉備」と呼ばれていたのかは明らかではない。古くから「黍(きび)」の豊かに稔る農耕の適地であったためであろうとする説が主張されているが、確かなことはわからない。

4.7 平成13年(2001)『日本古代地名事典』 吉田茂樹 『君・公説』

従来より、「きび(黍)」の意として定着しているが、古代地名の比較検討からすれば、「きび(黍)」の意は、ほとんどないといってよい。大化前代より、ヤマト王権の片腕として活躍し、地方の首長の尊称である「きみ(君・公)」を国名にした可能性がある。

5 『先代旧事本紀大成経七十二巻本』の発見

『先代旧事本紀大成経七十二巻本』は、岡山県立図書館と岡山大学図書館蔵書になっています。『続神道大系』で4冊に分冊され、黄蕨国は、『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』 小笠原春夫校注 平成11年 神道体系編纂会に収録されています。

黄蕨、黄蕨津彦命に注目してください。黄蕨国の初見は、推古30年(622)成立の『先代旧事本紀大成経』巻第三陰陽本紀の「此神座黄蕨前国一宮矣、潤世界神、有威徳神」です。

6 『吉備国の語源 黄蕨と羈縻（きび）政策』

岡山県の研究者として黄蕨説を正しいとしているのは、『吉備国史』の小早川秀雄のみです。吉備の語源は黄蕨です。黄蕨国の「黄なるわらび八本を生ずる」の比喩している意味の解読が必要です。岡山県の江戸時代から戦前までの研究者は、「8本の黄色いワラビ」を植物生態学と考え「ワラビの突然変異」として考察しています。植物生態学説を間違いと考え、地名学で考察し突厥国にたどり着きました。

6.1 地名学と突厥国

地名学とは「人が動けば地名が残る」という発想です。黄蕨国は突厥国からの渡来者（トルコ系民族の遠祖）が建国したと考え突厥国を調査しました。突厥帝国の成立は552年であり、583年にモンゴル高原を本拠とする東突厥と、中央アジアを支配する西突厥に分裂しました。突厥国内にはソグド人が多く、突厥と中国・ササン朝ペルシャ・東ローマ帝国を仲介する使節の役目を果たしていました。

6.2 突厥国の人名「中国の（二十四史）突厥伝 622年以前調査」と岡山県地名の比較

「テュルクのカガン系譜」の中の5人の名前と、岡山県内の地名が一致している事実を発見しました。突厥国の東西分裂は583年であり、分裂による混乱により黄蕨国へ渡来したと考えました。

可汗（カガン・可汗とは君主号）	岡山市南区妹尾の汗入（あせり）
突厥国バルハシ湖のイリ川	備前市の伊里川
伊利可汗（イリグカガン）（552～553） 頡利可汗（イリカガン）（620～630）	備前市伊里（いり）
地頭（イリクの子）	総社市地頭片山（古墳・地頭に21基） 高梁市川上町地頭（大杉塚古墳） 鳥取県八頭郡智頭町（智頭枕田遺跡）
バガ可汗（587～588）（乙息記の子）	ハガ遺跡（岡山市高島小学校） 岡山市北区芳賀（はが） （飯盛山古墳・打越塚古墳） 久米郡美咲町大埴和 埴和（はが）
阿波可汗（大邏便、アパカガン）（581～587） （木杆可汗の子）	津山市阿波（あば）

7 吉備国への渡来元は何処か

松本秀雄氏（大阪医科大学名誉教授）は、日本民族の源流を考えると、「日本民族の基層をなす人々は、北方型蒙古系民族に属し、その源流はバイカル湖畔にある。」と結論づけています。ロシアのバイカル湖の近くに東突厥国がありました。流れの豊かなアムール河を下って吉備国に渡来することは、さほど困難なことではありませんでした。

7.1 ブリヤート人

シベリアのバイカル湖畔のブリヤート人は日本人と酷似しています。バイカル湖周辺が、アルタイ諸民族の発祥地だとされています。ブリヤート共和国はロシアでは数少ない仏教国です。世界遺産でありシベリアの真珠とよばれるバイカル湖は「三日月湖」と呼ばれます。日本列島とバイカル湖は共に三日月の形です。ブリヤート人の伝承に、「神がバイカル湖を掘った土で日本列島を作った。だから日本人とブリヤート人は兄弟なのだ」という話があるそうです。バイカル湖は地図で見るととても小さく見え、長さ 636 km、最大幅 79,4 km です。しかし形は日本の本州に似ており日本列島がスッポリ入ってしまいます。



7.2 日本人バイカル湖畔起源説

「日本人バイカル湖畔起源説」は、日本人の起源を遺伝学や考古学からブリヤートのバイカル湖周辺としています。言語学からもブリヤートのバイカル湖周辺となります。

7.2.1 Gm 遺伝子からのバイカル湖畔起源説

松本秀雄氏（大阪医科大学名誉教授）は、『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』で、「日本民族の基層をなす人々は、北方型蒙古系民俗に属し、その源流はバイカル湖畔にある。」と解説されました。

7.2.2 考古学からのバイカル湖畔起源説

考古学の加藤晋平氏（国学院大学教授）は『日本人はどこから来たか』で「1万2千年前～1万3千年前に東日本を覆ったクサビ型細石核をもつ細石刃文化を担った人類集団の技術伝統は、バイカル湖周辺から拡散してきたものである。」としています。細石刃は革新的技術であり、各地で自然発生したとは考えにくく、バイカル湖近辺から日本地域へ人の移動とともに技術が広がったと推測しています。旧石器時代の最終に現れたのが、細石刃文化です。この細石刃文化期（14,300～12,000年前）の遺跡は、全国で500個所を優に超えています

加藤晋平氏は、この考古学からの仮説と松本秀夫氏の研究が全く同じ結果を示したことから「恐ろしいほどの一致といわざるを得ない。」と述べています。

7.2.3 『騎馬民族がもたらした日本のことば』東巖夫氏

東巖夫氏が『騎馬民族がもたらした日本のことば』を出版されたのは2009年です。東京学芸大学付属世田谷中学校教諭を退職後に留学し、ウイグル語、古代テュルク語、ロシア、モンゴル、満州語を学び、言語学習歴は、独・仏・中・韓・ギリシャ・ラテン語に及んでいます。『騎馬民族がもたらした日本のことば』という本を書くための言語学習に驚かされます。このテーマに関しての先行研究は皆無です。そして、騎馬民族言語が日本語に対してどれだけ重要な、どのような影響を与えたかの結論を出されました。古代に渡来した騎馬民族とは、アジアの内陸、モンゴル高原付近に起源を持つテュルク族(突厥族)で

す。と。

「古代テュルク語から日本語への流れの深層」で、バイカル湖を源郷とする突厥族から、日本民族の源郷がバイカル湖と説明され、古代テュルク語と日本語との関連を研究され、「日本語の訓読のもとになった古代テュルク語」として、訓読とは漢字を国語に当てはめて読むことです。そして、訓読することが必要となった背景として、古い時代から漢字文化圏にあった日本列島、日本列島の共通言語となれなかった古代テュルク語、日本列島の漢字と古代テュルク語との出会いとして、「日本の社会では長い歴史を通じて、文字としての漢字と、音声としての古代テュルク語を併用するという、言語のよりよい伝達方法が求め続けられて来たはずです。それは生物学でいう進化と同じ過程です。そしてついに、漢字に、それと同じ意味を持つ国語(実は古代テュルク語)の音声当てはめて読むという、まさに驚くべき方法、つまり、訓読と呼ばれる表現方法が創造されたわけです。」と。

7.2.4 日本人に瓜ふたつ!? 「キルギス人」とは



キルギスでは「大昔、キルギス人と日本人が兄弟で、肉が好きなのはキルギス人となり、魚を好きなのは東に渡って日本人となった。」とされています。またキルギス人と日本人は顔がそっくりです。キルギス人と日本人は見かけが「瓜二つ」で、一見しただけでキルギス人か日本人かを見分けることは困難です。そのようなこともあり、キルギスの人々は日本に対する関心が非常に強く、日本語教育もとても盛んです。勤勉です。コマや凧上げの文化もあります。

8.1 キルギス共和国



キルギス共和国、通称キルギスは、中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和制国家。首都はビシュケク（旧名フルンゼ）。かつての正式国名はキルギスタンであり、現在でもこの通称が公式に認められています。

9 羈縻（きび）政策

突厥国を調査していて**羈縻（きび）政策**を知りました。古代中国皇帝が周辺諸国の君主と名目的君臣関係を結び、国際秩序が維持されていきました。突厥国の東西分裂は583年であり、分裂による混乱により黄蕨国へ渡来し、**突厥国への羈縻（きび）政策が、そのまま黄蕨国に持ち込まれた**と考えました。羈縻とは「羈：午の手綱、縻：牛の鼻綱」を意味しています。つまり、「手綱・鼻綱で周辺諸国を中国から離反しないように繋ぎ止めておく」古代中国の**間接支配の方法**です。突厥国は7世紀末に唐から独立し、683年に突厥第2帝国が成立し744年に滅亡しました。

10 まとめ 羈縻（きび）政策と日本人バイカル湖畔起源説

① 奈良時代に風土記の撰述に際して、和銅6年(713)の詔勅「**郡、郷名を嘉字二字を以て示せ**」があります。地名には縁起の良い字(嘉字)を当てよとの詔です。しかし、この詔勅の目的を説明した論文は無いようです。

柳田国男氏は『地名の研究』のなかで、「人間の行為であるとするれば、その趣旨や目的の無いはずはない」とし、先住民の縄文人がつけたか、アイヌ人がつけたか、または新たに侵入した渡来人がつけたにしても、地名をつけた目的が必ずあったとしています。

この詔勅の目的は**羈縻政策を隠すこと**にあったと考えます。つまり、**吉備国の語源は羈縻政策**となります。

② **黄蕨との表記は東突厥国**を意味しています。**東突厥国から吉備国への渡来**です。これは日本人バイカル湖畔起源説の補説であり、古代から吉備国への渡来ルートがありました。

③ 福井県敦賀市に氣比神宮と化氣神社があり、氣比はキビと読めます。氣比神宮の「土公」は「保食神(うけもちのかみ)降臨の地」です。『岡山県神社誌』には、保食神を祭神とする神社が岡山市11社・瀬戸内市8社あります。これは「保食神(騎馬民族)の軌跡」と考えます。騎馬民族は保食神として日本へ侵攻しました。

④ アルタイ語民族のほとんど全てに見られる文化的要素が扶余、高句麗を通じ、さらに百濟、新羅など朝鮮半島を経由して、古代日本の形成期に吉備国に伝わりました。しかし岡山県の古代史研究は朝鮮半島までで止まっています。

11 参考文献

- ① 正徳3年(1713)『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』岡山大学池田家文書
- ② 『備陽記』享保6年(1721)石丸定良 昭和40年 日本文教出版(株)
- ③ 『黄蕨雑録』宝暦2年(1753) 石井好胤 岡山県立図書館蔵
- ④ 『東備郡村志』『吉備群書集成(二)』昭和45年 歴史図書社 p322~p323
- ⑤ 『児島参修高島考写』水原岩太郎 昭和15年 p8~p9
- ⑥ 『野菜の日本史』青葉高 2000年 八坂書房 p219~p222
- ⑦ 『備陽国誌』 「吉備群書集成(一)」昭和45年 歴史図書社 p109
- ⑧ 『寸箴之塵 上巻』土肥経平 p1『吉備群書集成第一巻』昭和45年 歴史図書社
- ⑨ 『岡山県児島郡誌』私立児島郡教育会編 昭和52年 文献出版 p370~p372
- ⑩ 『岡山県通史上編』永山卯三郎 昭和51年 岡山県通史刊行会 p8
- ⑪ 『岡山県史 古代Ⅱ』吉田晶 平成2年 岡山県 p2~p3

- ⑫ 『日本古代地名事典』 吉田茂樹 2001年 新人物往来社 p83
- ⑬ 『岡山県史 原始古代1 第二巻』平成3年 岡山県
- ⑭ 『先代旧事本紀大成経 (一)・続神道体系 論説編』小笠原春夫 平成11年 神道体系編纂会
- ⑮ 『実は日本人の故郷?』氷の芸術バイカル湖と聖地ブリヤート共和国
<http://kakeru-life.com/2016/02/09/lake-baikal-buryat-republic/>
- ⑯ 『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』松本秀雄 1992 日本放送出版協会 p104~p197、
- ⑰ 『日本人はどこから来たか—東アジアの旧石器文化』加藤晋平 1988 岩波新書
- ⑱ 『騎馬民族がもたらした日本のことば』東巖夫 2009年 露満堂
- ⑲ 日本人に瓜ふたつ!? 「キルギス人」とは
<https://matome.naver.jp/odai/2138121261106530301>
- 20 『吉備国の語源「黄蕨」調査報告書』丸谷憲二 平成20年8月
- 21 『吉備津神社の注連柱 黄薇』丸谷憲二 平成23年12月
- 22 『キルギス共和国と日本』丸谷憲二 平成25年1月
- 23 『吉備国の語源 黄蕨と羈縻(きび)』丸谷憲二 平成25年3月 吉備歴文会
- 24 『吉備国語源考 黄蕨と羈縻説』丸谷憲二 平成28年9月
- 25 『吉備児島と神武天皇聖蹟高嶋宮伝説地の考察』丸谷憲二 平成27年6月
- 26 「アルタイ語民族の神話と伝承」佐口透『騎馬民族とは何か』昭和50年 毎日新聞社
- 27 『氣比神宮と黄蕨(吉備)国 保食神(騎馬民族)の軌跡』平成25年11月 丸谷憲二

大井透氏(香川県坂出市)は、私の2冊目の著書『荘内半島の中世史 学館院記録書文書調査報告書』平成26年9月 恩徳寺寺史編纂室出版の共同執筆者です。執筆のための史料調査で『陶山系譜』を発見されました。